

沖縄だれにも書かれなかつた戦後史（5）

佐野眞一

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

エリート議員の失踪と怪死

那覇港からそう遠くない那覇市西一丁目のマンションに事務所を開く西平守儀は、沖縄戦後史の光と影を散乱させて怪死した中村眺兆と最も親しかった弁護士である。

西平に会ったのは、同郷で同じ弁護士仲間の西平なら謎めいた中村の失踪事件や摩文仁の崖からの転落事件、そして最期の変死について、何か知っていることがあるだろうと思ったからである。

——西平さんは中村氏とは三中（現・名護高校）の同級生だったと聞きましたか。

「いや、三中は違います。小学校と琉大（琉球大学）で一緒でした」

琉球大学は一九五〇（昭和二十五）年、アメリカの民主教育の高度普及という文教政策のもと、米施政権下にあった当時の沖縄で唯一の総合大学として創設された。

——彼は三中から琉大に行ったんですか。

「彼は小六から三中に行き、琉大に入った。私と彼は琉大の一期生です」

——すると、琉大から明治大学に行き、そこから東大の大学院に進んだんですか。

「そうです。彼は口を開けば、東大、東大って言っていましたね（笑）」

西平によれば、中村が弁護士を開業したのは一九六二（昭和三十七）年の春だったという。

「僕と二人で事務所を開いたんです。ところが、それから暫くしたら立法院議員に立候補するという

話になった。彼はやる気満々でね。対立候補のない信任投票で当選しちゃった。それからが大変でした。彼が議員になったので、二人分の仕事をしなくちゃならなくなりましたからね。それで彼が議員になって一年ほどして、事務所を別々にしたんです」

中村が立法院議員に初当選したのは、一九六二年十一月に投票が行われた第六回立法院総選挙である。弁護士事務所を西平と一緒に始めて約半年後のことだった。

「でも、次の選挙のときは最初の選挙のときはすっかり人が変わっていました」

中村にとって二期目にあたる第七回立法院総選挙が行われたのは、一九六五（昭和四十）年十一月である。中村はその任期中の一九六六年七月に東京で失踪事件を起こした。

——人が変わったという？

「二期目の選挙のときは、同期生がみんな離れたんです。私も離れたし、一番のスポンサーだった島産業不動産のオーナーの島繁勇も距離をとるようになった」

島は中村と同じ三中のOBである。島にはすでに連絡をとっていた。だが電話をすると、少し前に脳梗塞で倒れたため、会うのは勘弁してほしいとの返事だった。このため、西平と会った時点ではまだ島本人の話は聞いていなかった。

「そのとき島は、政治資金集めの責任者が西平ならば、自分がいくらでも金をつくるが、そうでなければもう出さん、と僕に言ったんです。結局、僕は責任者にならなかった。そのとき彼はもう、僕らのわからん世界に行っていたんです」

——つまり、最初の選挙のときに応援した同じ山原出身の西平さんも島さんも、わけのわからん連中と付き合いはじめた中村から離れたというわけですね。

「はい。亡くなった人を悪く言いたくはないけれど、彼は立法院議員になって、俺のものは俺のもの、人のものは俺のもの、という人間に変わってしまった。(那覇の飲み屋街の)桜坂で飲んでいても、カウターのなかに入りシエーカーを振って、ジョニ黒をボンボン空ける。そのツケが全部、事務所に回ってくる。若い頃は、みんなの期待を一身に集めた沖繩の希望の星だったんですけれどねえ……」

——女性関係もハデだったようですね。

「噂はいっぱいありました。それはモテましたからね。背も高いし、顔もハンサムだし、歌もうまいし。キサス、キサスなんていう歌を原語で歌うんです」

——鼻持ちならないヤツですね。

「でも会っているときは本当にいいヤツなんです。彼を悪く言う人はいなかった。若い頃は、カオルと呼ばれて可愛がられるナヨナヨした少年だったんです」

——カオルというのは、中村晁光に改名する前の仲村渠馨なかむら けんぎの馨のことですね。

「ええ。それからすぐ例の失踪事件が起きた。政治の世界に深入りするに従って金銭的な問題が出てきたんだと思います。摩文仁の崖から転落したときも、いろいろな噂が飛び交いましてね」

——どんな噂ですか。

「あんなところから間違っても落ちるはずがない、もし間違って落ちたなら命がないだろう、と。崖の下に隠れていたんじゃないかという話もありました」

——自殺未遂の狂言というわけですね。

「ええ、ちょうどその頃、タクシー業界の汚職事件が発覚したんです」

タクシー汚職事件は、一九六八(昭和四十三)年に発覚した疑獄事件である。個人タクシーの免許

取得を巡り金品の授受があったとして、当時副首席だった小渡二郎を含め琉球政府の幹部約百二十名が逮捕された。

——タクシーといえば、中村の実兄もタクシー会社をやっていましたね。その事件には彼も絡んでいませんか。

「絡んでいたどころか、そのお兄さんにあげたんですよ。タクシー会社を」

——エッ、眈眈自身がですか。それじゃ完全に利権目的の「政治屋」だ。

「そうです。彼自身がタクシーの営業免許をとってやって、何十台かの車を持つタクシー会社をお兄さんのためにつくってやった。すべて彼の采配でした」

——ところで、中村は一九七六（昭和五十一）年四月に、福岡の片田舎で変死体で見つかりますね。

「死体の確認には、東大の大先輩の真喜屋実男先生が行きました。先生は『中村は凍死したんだ』と言っていました」

——凍死？

「その晩は、福岡にたまたま何十年ぶりの寒波がきたんだそうです。で、睡眠薬を少し飲んで酒をやっているうち、寝込んでしまったらしい。所持金は十数万円しかなかったそうです。僕は先生に『原因は何ですか』と聞きましたが、先生は『いや、それはもう、僕は聞かなかった』と仰っていました。結果がそうだけというだけで、もう十分だと」

西平に会って一番聞きたかったのは、一九五三（昭和二十八）年に大宜味村で起きた米軍現金輸送車強盗事件のことだった。

——中村がその事件に絡んでいたというんです。聞いたことはありませんか。

「聞いていません。ただ、軍作業をやっていたとき、悪さはしていましたね。彼はチェッカーをして
おったんです」

——チェッカー？

「配車係のことです。それでトラック一、二台分のビールをチェックしたことにして、金武湾きんぶの料亭
に持って行って転売するんだそうです。それを米軍の憲兵に知られたので、改名したという話は聞いて
たことがあります」

これは注目すべき発言だった。元沖縄教職員会政経部長の福地曠昭ふち びょうしやうは、大宜味村の事件を担当した
宜野湾署のの びの宮城という刑事から、中村をあの事件の犯人一味と睨んで取り調べたという話を聞いている。
この二つの話を重ねると、こんな想像が浮かぶ。

中村は「戦果アギヤー」仲間だった顔見知りの犯人たちから脅されて、米軍現金輸送車の運搬時間
と運行ルートを教えた。米軍のチェッカー経験がある中村なら、それを調べるのはたやすかつたはず
である。若い頃の中村は女のおとなしなかつたというから、彼らの要求を無下むげには断れなかつた
という想像も働く。

私は西平と別れた後、事件に絡んで中村を調べたという宜野湾署元刑事の宮城義和に会おうと思っ
た。宮城の自宅は沖縄本島中部の北中城村屋宜原きたなかぎにあり、前述した元「東京トルコ」に近い。

そこを訪ねると、門は閉まっており、留守のようだった。

諦めて帰りかけると、夫人らしい女性が家に入っていくのが見えた。

入院中の夫を見舞って、いま帰宅したところだと言う。用件を伝えると、夫人は気をきかして、

「それでは、病院に電話して夫に聞いてみましょう」と言つて、質疑内容がこちらに聞こえるようにする配慮からか、ドアを開けたまま玄関先に置いてある電話をかははじめた。

「お父さん、いま東京の雑誌社の人が来て、お父さんが担当した事件について聞きたいって言っているんだけど。昭和二十八年に大宜味村であつた米軍の現金輸送車の強盗事件に、元立法院議員の中村眺兆さんっていう人が関わつてたんじゃないかって……」

夫人の説明は元刑事の妻らしく、要領を得たものだった。暫くやりとりがつづき、電話を切つた夫人は、夫から聞いた伝言内容を簡潔に説明してくれた。

「その事件については、申し訳ありませんがお会いしてお話しすることも、電話口でお話しすることもできないと申しました。お役に立てず本当に申し訳ありません」

それだけ聞けば十分だった。もし、大宜味村の事件と中村がまつたく無関係だったとすれば、わざわざそんな丁寧な答えをする必要がない。宮城の含みのある答えそれ自身が、事件と中村の間に何らかの関係があつたことを言外に認めていた。

沖縄県警OBの嘉手苺福信かてまきふしゆが書いた『波瀾万丈の日々』には、大宜味村事件の担当者として、福地が事件と中村の関係を聞いた宮城とは別に、四人の刑事の実名が出てくる。三人は物故しているが、平田直正という元刑事が健在だということがわかつた。零細な飲食店が密集し、低い家並みが連なる那覇市大道の奥にある平田の自宅を訪ね、来意を告げると、夫人らしき初老の女性が出てきた。

——その昔、ご主人が捜査に関わつた大宜味村の米軍現金輸送車強盗事件のことをお聞きしたいんですか。

そう切り出すと、普段着の女性は、さもすまなさそうに答えた。

「主人は緑内障で失明して、目が見えません。それ以来臥せっております。事件はもう過去のことですし、逮捕された方も罪を償って社会に出てきています。そんなわけで、せっかく遠い所を来ていただいて申し訳ありませんが、お役に立てないと申しております」

———そうですか。では、あの事件の資料などはお持ちじゃないでしょうか。

「以前には少しあったんですが、二年ほど前に全部焼却してしまいました」

嘉手苅はじめあの事件を担当した刑事から、事件と中村の関係を聞き出すのは、これ以上はもう無理だった。あとは中村の未亡人や、故郷の今帰仁に残る中村の親類、それに若い頃中村と親しかった友人を探して話を聞くほかなかった。

中村の未亡人の中村よねは、税理士事務所を兼ねた那覇市中心部の久茂地のマンションに住んでいた。そこに連絡すると、よねは案内簡単に来うことを約束してくれた。

國場組の本社近くのホテルで会ったよねは、ゴマ塩の髪をひつつめにした、いかにもキャリアウーマン風の初老の女性だった。聞きたいことは山ほどあった。

———ご主人と知り合ったきっかけは何だったんですか。

「明治大学の法学部で同じ研究室だったんです。弁護士資格ですか？ その時代はまだです。私はその後、明治の大学院で税理士の免許を取り、あちらは東大の大学院で弁護士資格を取ったんです」

———お生まれは福島県で旧姓は小針と聞きました。東北の「政商」として有名な元福島交通社長の故小針曆二氏とは親戚になるんですか。

「ええ、出身は福島です。旧姓は小針ですが、小針曆二さんとは関係ありません」

——なるほど。結婚は何年ですか。

「それは聞かれると思つたんですが、戸籍を見ないとわかんないなあ（笑）。えーつとね、大学院を卒業してまもなくですから、私が二十四くらいのときです」

よねは一九三三（昭和八）年の生まれだから、結婚は一九五七（昭和三十二）年頃ということになる。

「テルアキは私より三つ年上でした。彼は琉大を二〜三年やってから、潜水艦で沖縄からやってきたと言つてました」

——ええつ、潜水艦ですか。

「まだ留学ができないというか、本土には正式に行けなかつた時代です」

中村が一九五〇年に開学された琉大に二、三年行つてから日本に來たということは、一九五二、三年頃に本土に渡航したことになる。もし本土への渡航が五三年ならば、大宜味村の事件と同じ年である。

よねが言うように、中村がその年に潜水艦で本土にやつてきたとするなら、その潜水艦は当時の状況から考えて、米軍の潜水艦と考えるのが自然である。

ここから自然に浮かんでくるのは、こんなミステリー小説じみた連想である。

大宜味村の事件で警察に疑いをかけられた中村は、かつてチェッカーとして働いた米軍に、捜査協力することを条件に救いを求めた。米軍は英語が堪能な中村を高く評価し、利用価値があると考えた。想像をさらにたくましくすれば、米軍はCIC（米軍対防諜部隊）の要員になることを条件に、この取引に応じた可能性も否定できない。そして、米軍の潜水艦で日本に逃がした。

東大の大学院を修了し、弁護士から立法院議員になる沖縄のエリートコースを歩んだ中村は、アメリカにとってきわめて重宝な存在だったに違いない。

その後の失踪事件や摩文仁の崖からの転落事故、そして最期の怪死も、CICの謀略がらみの事件だったとすれば、それなりに納得がいく。

だが、これはほとんど根拠らしい根拠がない勝手な推測に過ぎない。

それはそれとして、中村の周辺には、なぜ潜水艦での本土渡航といった謎めいた話ばかりが渦巻いているのだろうか。

彼女の話でもう一つ興味深かったのは、中村家の先祖に関する話だった。

——中村さんの旧姓は仲村渠ですね。どんな家柄だったんですか。

「私の聞いた範囲で言えば、琉球王室の落とし胤（おとしのむすこ）だったそうです（笑）。首里城に仕える士族だったんですが、明治の廃藩置県で左遷され、都落ちして今帰仁（いまかえに）に行った（笑）。廃藩置県のときは、大和につく方と清国につく方に分かれて、清国につく方に回ったらしい。つまり「負け組」に入っちゃった（笑）。だから私に言わせると、最初から政治的に不運なDNAを持った人だったんですね」

——それじゃ、家がものすごく貧しかったというわけじゃないんですね。

「家柄はよかったですよが、私が知り合った頃は、もうどん底だったですね。兄弟はみな頭がよかったですよが、テルアキ以外は大学に行っていないはずですよ。お父さんは戦時中、サイパンに出稼（いせ）ぎに行つて家に仕送りしていたという話ですよ」

——中村さんは立法院議員の二期目の途中に東京で失踪事件を起こします。あの事件について何かご主人から聞いていることはありませんか。

「いえ、何も言いませんでした。私にもあの事件はよくわからないんです。本人は学生時代から、放浪癖がありましたから、その癖が出たんじゃないかと思つてますが……。大体、私らは普通の夫婦と違つて、お互い相手のやることに無頓着なんです」

——それじゃ摩文仁の崖から転落した理由も、ご主人に聞かなかつたんですね。

「はい、聞いても説明するような人じゃありませんから」

よねは中村が福岡で変死体で見つかつたときも、現場には行かなかつたという。

「検死してくれたお医者さんのところには、だいぶたつてお礼の挨拶には行きましたが。脳血栓の発作が突然起きたんじゃないか、というのがお医者さんの説明でした」

——お子さんはいなかつたんですか。

「はい。いなかつたから、両方とも勝手なことをやっていたんでしようね（笑）」

そろそろ、大宜味村の米軍現金輸送車強盗事件について切り出す潮時だった。

——あの事件に若き日のご主人が絡んでいたという話があるんです。

よねはこの質問を全否定すると思つた。だが、返つてきたのはむしろ肯定気味の意外な答えだった。「もし絡んでいたとすれば、ジミーペーカリーの社長さんとか、スカリーさんという不動産屋の社長さんなんか聞いた方が早いんじゃないですか。その二人とは仲がよかつたから」

——えつ、ジミーペーカリーの社長さんと、スカリーさんですか。初めて聞く名前です。彼らは二世なんですか。

「いいえ、若い頃進駐軍で働いて、事業で成功した人です」

よねに二人の連絡先を聞いたが、知らないという。彼らの連絡先は後で調べることにして、質問の

矛先を中村の親族関係に変えた。

——中村さんの変死を報じた新聞によると、遺体の確認に行ったのは実兄の恭典さんだったそうですね。ご健在ですか。

「いいえ、もう亡くなりました」

——その新聞記事には、中村さんは十年前に奥さんと離婚し、当時は姪にあたる神谷サト子さんという方と同居していたとも書いてあるんですが。

「離婚はしていません。だから亡くなった後、相続放棄したんです。サト子さんというのは、お姉さんの子どもです。あの頃、テルアキは東京と沖繩を行ったり来たりしていましたから、東京のマンションで一緒に住んでいたんです」

妻と離婚しないまま、姪と同居する。中村のやることは聞けば聞くほど謎だった。

よねは、最後にこんなことを言った。

「テルアキは皆さんが寄ってたかつて食い殺したな、という気はしますね。親戚じゅうが、能力ある者に皆でぶら下がってね。美空ひばりと同じですよ（笑）」

——沖繩の門中意識の悪いところですね。

「ええ、別の見方をすれば、あの戦争で生き残ただけでもよかつたのかもしれないが……。戦争中は斥候兵^{ちしこうへい}として使われたみたいですよ。人が死んでいるのも随分見たり。だから家のなかには赤いものを置いてくれるな、と言ってました。赤い色は血を思い出すんでしょう。沖繩観光のお客さまが来てもひめゆりの塔に案内するなんてことはとてもできない、と言ってました。案内役はいつも私にさせていました」

よねの話は大宜味村の事件や、その後の謎めいた事件を解明する直接の手がかりにはならなかった。だが、中村眺兆という人物の内面を知る上では、大きなヒントになった。

明治の琉球処分が名門の仲村渠家の没落の始まりだったこと、家が貧しく親戚じゅうで優秀な中村に頼ったこと、沖繩戦で幼い中村の精神が深く傷ついたこと……。それらのことを考えあわせると、中村の謎に満ちた四十六年の短い生涯そのものが、戦後沖繩の治癒不能なトラウマの軌跡だったといえなくもなかった。

よねに会った翌日、中村の故郷の今帰仁村を訪ねた。

今帰仁村は、沖繩本島北部の本部半島の突端にあり、那覇から車で三時間近くかかる。隣の本部町は、沖繩海洋博会場跡地につくられた美ら海水族館などを訪れる観光客で賑わっていたが、今帰仁村に人影はほとんど見当たらなかった。

眩しいほどの常緑樹に覆われた集落は、道に落ちる木々の影ばかりが濃い、南国の田舎の鬱囲気を強くにじませていた。あたりの風景はどれも濃淡がくつきりして、目に痛いようだった。

沖繩の難読地名として、勢理客（浦添市）、大工廻（沖繩市）などと並んで必ず例に挙げられる今帰仁は、糸満、宮古とともに沖繩三大美人の産地といわれる。

中村のことを知っているような関係者を探すため、まず役場に行った。玄関先にハイビスカスの花が咲く木造の役場は土曜のため、宿直の女性が一人いるだけだった。

役場の建物はセピア色の古きよき時代を感じさせて、沖繩映画のセットのようだった。宿直の女性は、親切に心あたりのところに電話連絡してくれた。その結果、村には中村の従兄弟、実妹、それに

中村と一緒に軍作業をやった人物がいることがわかった。

最初に中村の従兄弟の家を訪ねることにした。白い一本道の両側にパイナップル畑が広がるだけの単純な風景は、初めてこの村を訪ねた者の方向感覚をかえって狂わせた。

ある民家で道を尋ねると、庭で立ち小便の途中だった六十年配の男が、そのままの恰好で振り返り、目的の家を教えてくれた。そんな田舎者丸出しのふるまいとは対照的に、振り向いた顔だけはハツとするほど彫りが深く、スペイン人を思わせた。

東シナ海に臨んで異国人の渡来が容易な今帰仁は、やはり混血の美男美女の特産地らしかった。日本人離れしたイケ面老人から聞いた家を訪ねると、従兄弟は野良仕事に出ているらしく留守だった。

仕方なく近所の南欧風リゾートホテルに勤める従兄弟の息子を訪ねた。だが彼が言うには、早くに東京に出た中村についてはほとんど何も知らないとのことだった。

同じ集落に住む中村の実妹にも会ったが、近所の畑で作ったウコンを仕分け作業中の実妹夫婦からも、同じ理由でこれといった話は出なかった。

中村の幼なじみからも、中村家は土地がなかったため、海に潜って蛸捕りをして生計を立てていた、といった程度の話が出ただけで、中村にまつわる一連の事件については何も知らなかった。

そんななかで、渡久山祐弘という村会議員だけは、中村がらみの謎の事件の一端を知っていた。

渡久山は「摩文仁の崖の下の方から人のうめき声が聞こえて、救出されたと聞いています。何でも崖の途中の木にひっかかっていたとのことでした」と言った。

中村とは竹馬の友で、軍作業も一緒にやったことがあるという渡久山は、そう言う一方で、大宜味村の事件で逮捕された四人組は、中村と同じ今帰仁の運天地区の生まれだが、彼らと幼なじみだった

中村は、あの事件には絶対絡んでいない、と断定した。

「私はあの事件で捕まった犯人四人を知っています。全員この近所に住んでいました。主犯格の男はいかにも強盗をやりそうな雰囲気のやつでした。非常におとなしなかったテルアキとは、まったくタイプが違っていたし、親しくありませんでした」

——では立法院議員時代の上京中の失跡事件や、摩文仁の崖からの転落事故、そして最期の変死は、どう理解されますか。私には中村氏が大宜味村の事件に何らかの關係を持っていて、それが影を落としているような気がしてならないんです。

南国の光が眩い庭先で取材に応じた渡久山は、私の見方をきっぱりと否定した。

「あれは沖繩の政治の世界に若くして入り、急速に伸びて行くのを、出る杭は打たれるの喩え通り、寄ってたかつて潰されたんだと思います。失踪事件も摩文仁の事件も最期の変死も、大宜味村の強盗事件と關係があつたとは思いません」

結局、今帰仁では中村と事件の關係を窺わせるこれといった情報は得られなかった。紺碧の海と白砂がきらめくこの村で聞こえてきたのは、むしろ否定的な意見ばかりだった。

今帰仁から那覇までの帰路、浦添に立ち寄った。中村の親類から、浦添に中村曙光の実兄の恭典の未亡人が住んでいると聞いたためである。そこに当たれば、中村が変死したとき、中村と同居していたと新聞に書かれた姪の神谷サト子の手がかりがつかめるかもしれない。

浦添市の密集住宅地にある家を訪ね、中村恭典の未亡人に神谷サト子の消息について尋ねると、思わぬ答えが返ってきた。サト子は息子の嫁だという。ということは甥と姪が従兄弟同士で結婚したこ

とになる。サト子は近所の弁当屋に仕事に出かけているという。

そこに案内してもらい、サト子に会った。サト子はもう五十五歳になるはずだが、沖縄出身の女性らしく、年齢よりはずっと若く見えた。

——神谷さんは中村さんの事務所で働き、同居もしていたそうですが……」

「働いたといっても電話番みたいなもんです。同じ所には住んでいませんが……」
エプロン姿のサト子は働く手を休め、沖縄名物の香片茶カキヤチでもてなしてくれた。だが、不意の客からの不躰ふたぶな質問を迷惑がっているのは明らかだった。

サト子は大宜味村の事件も上京中の失踪事件も知らないと言った。とはいえ、彼女が真実を語っているかどうかは最後まで疑問だった。沖縄の門中意識の強さが、そう答えさせただけなのかもしれない。中村の妻のよねは、その門中意識に排除された被害者だったのかもしれない。サト子に会ってそんな感想も浮かんだ。

親友の弁護士と未亡人に会い、故郷を訪ねて親類の話も聞いた。後に残された手がかりは、よねが言ったジミーペーカリーの創業者とスカリーなる男に会うことだった。

現在、沖縄県内に十八店舗の食品惣菜専門スーパーを構え、年商二十八億円をあげるジミーペーカリーは一九五六（昭和三十一年）年に創業された。同社を興した稲嶺盛保は本土ではほとんど知られていないが、沖縄戦後史のなかでは隠れた立志伝中の人物となっている。

一号店は沖縄本島を南北に結ぶ大動脈の国道五八（ごっばち）号線沿いの宜野湾市大山にあり、本社を兼ねている。食欲をそそるアップルパイやローストビーフが整然と並べられた店内は、「アメリカ

カ世」時代の活力ある沖縄を感じさせ、六〇年代のアメリカの若者の青春を描いた映画「アメリカン・グラフィティ」の世界にまぎれこんだようだった。

一九三〇（昭和五）年那覇生まれの稲嶺は、沖縄敗戦の直前、食料欲しさのため、名護近くの羽地はぶぢの米軍基地で食器洗いのボーイとして働いた。郷土防衛の「護郷隊」の連中からは米軍のスパイ視され、自分の死体を埋める穴まで掘られて殺されかかったこともあった。

戦後はそのまま米軍基地に残り、ドライバーとして働いた。ジミーというニックネームは、この時代につけられた。

最初、車を使った雑貨の移動販売は、店を構えてデリカテッセン（惣菜）を扱うようになり、ジミーの店の手づくりアップルパイはやがて沖縄に欠かせない味と評判になった。業績は順調に伸び、ジミーベーカリーは、いまや戦後沖縄の一つの食文化を代表するシンボルの存在にまでなっている。

思わぬ付加価値もジミーベーカリーのブランド化に一役買った。ジミーの店の近所には芸能界入りする前の南沙織が住んでおり、愛称シンシアの彼女がハイスクール時代よく通った店だった。この話は、南沙織フリークの間では神格化されたエピソードとして都市伝説化している。

テンガロンハット姿の稲嶺とはジミー店内のコーヒーストップでのインタビュートなった。少し英語靴ブーツりのあるイントネーションが、稲嶺のこれまでの人生を語っていた。

——亡くなった中村晁兆さんと親しかったそうですね。

そう尋ねると、稲嶺は「よく知っているよ。ただ私の仕事と彼を結び付けてほしくないな。触らぬ神に祟たたりなしだよ」と言って笑った。

稲嶺は明らかに何かを知っている口ぶりだった。案の定、中村の周辺で起きたさまざまな謎めいた

事件と、これに対する私の見解を述べると、稲嶺は「むじ々領いた。

稲嶺の意味深な態度は、大宜味村の事件を扱った嘉手苳らの元刑事たちが、事件と中村の関係を匂わせた思わせぶりの言動と共通する印象があった。

しかし、稲嶺が中村とはもう関わり合いになりたくないと云っている以上、中村に関する質問をこれ以上つづけるわけにはいかなかった。

稲嶺は中村について、最後に「あれはあんまりいい印象の人間じゃなかった」とまた含みのあることを言った。

——ところで、スカリーさんという人をご存じですか。やはり中村眺兆さんと親しかった人で、ジミーの店の前にあったピザハウスでよく会っていたそうですが。

「スカリー？ ああ島繁勇のことね。うちの店の前のピザハウスは彼の貸家だった。彼は今婦仁の近くの屋我地島の生まれで、中村とは三中で一緒にやなかったかな。彼はジュークボックスを何百台と持っていて、いろんな店に貸していた」

中村よねから聞いたスカリーが、弁護士の西平から話が出た中村の政治的スポンサーの島繁勇と同一人物だったとは、ジミーの話を聞くまで想像すらしなかった。

——島さんも米軍で働いていたんですか。

「そうです。でも彼に会っても喋らんでしょうね。あまりいい話じゃないし」

そんな気になる台詞を聞いた以上、よけい島に会わないわけにはいかなかった。稲嶺と別れた後、島が経営する島産業不動産がある那覇市安里あさの高級住宅街に向かった。だが、事務所は見当たらず、

かわりに立派な邸宅の前に、元外務大臣の中山太郎によく似た顔だちの老人が太いステッキをついて人待ち顔で立っていた。

それがスカリーこと島繁勇だった。私の訪問を予期していたような島の唐突な出現に、私は妖術でもかけられたように、その場に立ちすくんだ。数日前の電話では、脳梗塞で療養中だと言っていたが、病みあがりには見えず、口舌くつぜつもはつきりしていた。人品卑しからぬ風貌といい、仕立てのいい背広といい、私が来るのを物陰からじつと窺っていたような風情ふうぜいといい、どこか現実離れしていて、白昼夢でも見るようだった。

島はアップルパイで成功した稲嶺と同様、ジュークボックスで大儲けし、戦後オキナワンドリームの主人公になった。だが島の周囲には、そんな型通りのサクセスストーリーとはおよそ不釣り合いのどこか秘密めいた雰囲気ふんいきが漂っていた。中村より二歳年上の島は、中村と同じ三中に通い、軍作業では、配車係の中村と勝連半島突端つちめのホワイトビーチの米軍施設と一緒に働いた仲だった。

——へんなことを聞きますが、なぜ島さんはスカリーっていうんですか。

「軍作業時代、スコットランド出身の係官が付けてくれたんです」

島はこの質問に付随して「本名も島袋から島に変えたんです」と言った。

島にも稲嶺と同様、大宜味村の強盗事件から失踪事件、摩文仁の崖からの転落事故、そして最期の変死についてひと通り尋ねた。だが、答えは聞く前から大体想像がついていた。島の答えはどれも、私の疑問を満足させるものではなかった。

私は中村の疑惑を追求するあまりとんでもない勘違いをしていたのだろうか。それとも逆に、中村の関係者は全員口裏を合わせて中村の潔白を証明したのだろうか。思いは千々に乱れた。

だが、それ以上問おうという気持ちには、正直もうなれなかった。中村の謎めいた人生を追って浮かび上がった矛盾自体が戦後沖繩が辿った道筋の困難さをありのままに語っているような気がした。

中村暁兆の人生には、琉球処分後の沖繩の歴史と、戦後沖繩がもたらした精神的荒廃がそのまま語られていた。中村の友人のジミー稲嶺とスカリー島の人生には、それとは対照的に「アメリカ世」の幸福感が、一瞬の輝きとなって照り返していた。

中村よねは沖繩の門中意識の前に躓き、姪の神谷サト子は門中意識の前に沈黙した。すべて、沖繩について書かれた本では知ることができない世界だった。

中村暁兆の謎めいた人生を追って沖繩中を走り回ったこの取材で、私はもう一つの沖繩を、この目で見、この耳で聞いた。それ以上の事実を知る必要がどこにあるだろう。

謎は謎として残った。だが、このファクトファイディング（事実探索）行は不思議な充実感があった。私にとってそれは中村の謎を追求する以上に、その行程自体が知られざる沖繩を全身で実感できたかけがえのない旅となった。

沖縄 だれにも書かれなかつた戦後史 佐野眞一著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,995 円（税込）

ISBN 978-4-7976-7185-8

ウェブでのご注文は [こちらにどうぞ!](#)